

おぎょうぎ

蜜瀬かえで 著

四人で囲むお弁当の時間。

わたしと、玉置と、かおりと、のんちゃん。  
いつも通りのお昼休み。

例によってまたインスピレーションに突き動かされた  
玉置がご飯そっちのけでスケッチブックに向かってしま  
っているのも、もういつもの光景になっている。

わたしも、

「しょうがないなあ」

とは言いつつ、慣れたもので。お弁当のおかずをおはし  
でつまんで、玉置の口元に持っていていく。

「はい、玉置。あーん」

「――ねえ」

そこに、自分のお弁当を食べながらわたしたちを見てい  
たかおりが言った。

「みゅー子のお行儀観として、タマのそれってどうなの？」

え？

どう？

どうって……どう？

「？」

「いや、みゅー子、いつもタマにお行儀お行儀言ってる割  
には、ご飯の最中に絵描きだしても怒んないんだなって」  
そう言われて。

「あ」

「……あんた、もしかして今気づいたの？」

あきれたような口調のかおりに、

「うん」

言われてみたら。

玉置とはじめてあったときからこんな風に絵を描いて  
る玉置にご飯食べさせて上げてたものだから。

「普通に受け入れちゃってた」

あ。でも、ほら。

「玉置って一応美術科じゃない？ これも勉強のうちだ  
から。勉強だし、しょうがないなー、とか？」

「あんた……。ちなみに、ご飯中にテレビ見るのとかは？」

「ダメ」

それにはきっぱり答える。

これはうち、というかおばあちゃんからの教えで。ごは  
んのときは、みんなで団らんする時間だからって。朝のニ  
ュース以外、食事中のテレビは一切禁止。

「で、それとこれの違いは？」

「……う」

返す言葉がでなかった。

たしかに。

今の玉置はわたしたちとの食事をそっちのけに自分の楽しみに没頭してしまっていて、それってつまり食事中にテレビに集中しちゃってるのと変わらなくて。

ああ、でもこうやって絵に集中してしまうのって、玉置のアイデンティティっていうか、これでこそ玉置、みたいなところでもあるわけで。

そういえば前に一回、描く紙を持ってなくて大騒ぎしたあげく、わたしのノートを貸してあげたら、それが次の授業に提出しないといけなかったノートで、それでまた大騒ぎしたこともあって。だから玉置のこれは止めさせようと思っても止めさせられるようなものでもないし。一回インスピレーションが沸いちゃったら、描くまで落ち着かなくなっちゃうし。そうしたら周りにも迷惑かけるかもだし。というか、玉置のインスピレーションって、ほとんどわたしが原因みたいなものだから、あれ、悪いのわたし？

わたしが玉置のそばにいるから玉置のお行儀が悪くなつて、それでわたしが叱らないといけないわけで、という

ことは、わたし、玉置と一緒にいちゃいけないってこと！？

「みゅーちゃん。……落ち着いて？」

その言葉通り、落ち着いた口調で口を開いたのは、普段通りマイペースにちっちゃなお弁当をついばんでいたのんちゃんだった。

「……のんちゃん？」

「私は、ね」

そう前置きして、のんちゃんはゆっくり口を開いた。

「お行儀がいいとか、悪いとかよりも。

みゅーちゃんが『良いな』って思ってるかどうかだと思うよ？」

「……『良いな』って？」

「みゅーちゃんは、タマちゃんが絵描くの、イヤ？」

「ううん。イヤじゃない」

むしろ、

「好きなだけ、ずっと描いててほしい」

これは本音。

だって、それがわたしの大好きな玉置だから。

絵を描いてる時の玉置は、集中してて真剣だけど、口元とか、いつも楽しそうで、生き生きしていて。その姿を見

てるわたしの方までうれしくなってしまうくらいに、そう、素敵だなんて思うから。

だから、絵を描いてる玉置をわたしは、

『良いな』って思う」

そう答えると、のんちゃんは、だったら、と。

「それでいいんじゃないかな？」

……。

……………わあ。

……すごいなあ。

のんちゃんって

すごいな。

そう感じたのは、わたしが、よくさつきみたくうだろうだ  
と思い悩んで考え込んでしまう性分だからかもしれない  
けど。

だけど、のんちゃんみたいに、シンプルに、ストレート  
に、感情を一番前にして考えられるのって、本当にすごい  
とわたしは思う。

にっこりと目を細めたその口元には、ご飯つぶ一つついでいたけど。

それを取ってあげつつ、かおりが、

「なんか、ゴメンね？」

「ううん。わたしこそ。かおりのおかげで気づいてなかった素敵なことに気づけたから。むしろうれしいくらい」

「野乃子様様だけどね」

「だね」

「あと、人前で好きとかあんまはずいこと言うな」

「そうかな？」

そう言って、わたしたちも笑みを交わす。

見つめるのんちゃんもにこやかで。

しかし、

「……でさ、さつきから言おう言おうと思ってたんだけど」

「え？」

「みゅー子の弁当、さつきからずつとタマがつまでるんだ  
けど。勝手に」

「……え？」

手元を見ると、ご飯以外のおかずはあらかたなくなっていて。

いつのまにか絵を描き終えて満足した玉置が、隣でりす  
みたいに頬を膨らませていて。

「玉置」

「ふえ？」

「っ！ ご飯を手で食べちゃいけませんって、いつも言っ

てるでしょっ！」

「……あ、そっちなんだ」

かおりがつぶやいて、のんちゃんと顔を見合わせていたけど。

「ふあってひゅふあへふあふえて」

「口にも物を入れてしゃべらない！」

わたしは玉置をお説教するのに氣をとらえていて。

「ほら手出す。もー、汚れた指でスケッチブックさわった  
らあとつくじやない。はい、ティッシュ」

「……ほんと、厳しいんだか、甘いんだか」

かおりは呆れた風に言うけれど、  
それに、うんうん。って頷いて。

「本当に、仲いいね」

うん。と、もう一回うなずき。

「仲が良いのは、良いことだ」

満足げに持ち上がったのんちゃんの頬を見て、

「……そうね」

観念したような声音のかおりだったという。

夏も近づく、ある日の昼下がりがりだった。